

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 向洋 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語, 数学)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 数学)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・ 身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・ 実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・ 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・ 様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

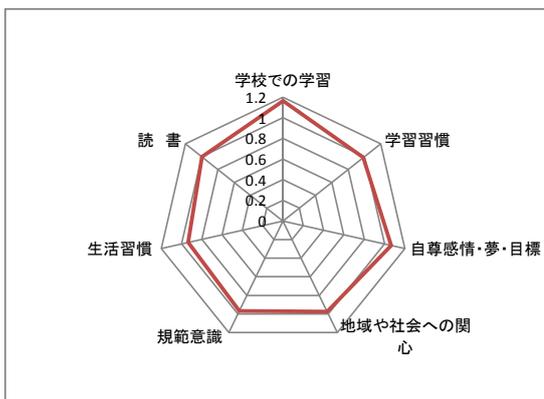
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 数学A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		数学A		数学B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	24.5	77	6.3	70	22.2	62	6.8	45
全国	24.8	77	6.5	72	23.3	65	7.2	48

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全体的には全国平均正答率をやや下回っていたが、「言語」に関する項目は高かった。「話す・聞く」「読む」に関する項目が低い傾向にある。 無解答率は、設問によっては若干高いものはあるが、無解答者が全くいない設問が多い。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	語句の意味を理解して文脈の中で適切に使う問題や、古典に関する問題の正答率が高い。	
	努力が必要な問題	文章の要旨を捉えたり、構成や表現の特徴について自分の考えをもったりする問題の正答率が低い。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全体的には全国平均正答率をやや下回っていたが、「読む」に関する項目は高かった。「書く」に関する項目は低い傾向にある。 記述式は無解答率が全国平均より若干高いが、それ意外はほぼ無解答者はいない。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	場面の展開や登場人物などの描写に注意して読んだり、登場人物の言動の意味を考えたりして、内容を理解する問題の正答率が高い。	
	努力が必要な問題	記述式の「書く」問題の正答率が低い。	
数学A	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回っており、「数と式」の問題が全国平均に比べて無解答率が高く誤答も多かった。 文字の計算についての力が不足しており、基礎的な計算力をつける必要がある。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	分数の乗法の計算をする問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	数量の関係を文字式で表したり、文章題から方程式をつくる問題は、無解答率が高かった。	
数学B	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回っており、数学的な表現を用いて説明するなどの記述問題が特に無解答率が高く、誤答も多かった。 数学的な技能や見方考え方の力が不足している。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	与えられた表やグラフから、必要な情報を読み取る問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	問題解決の方法や判断の理由を数学的な表現で記述する問題は、正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> 学校での学習状況については、「総合的な学習の時間」をはじめ、教科等の授業においても生徒自らが課題を見つけ話し合い活動を通して主体的に学習に取り組んでいることが分かる。 話し合い活動が各教科等において定着し、自分の意見や考えを述べる機会が確保されている。また、そのため、人前で自分の意見や考えを発表することが得意な生徒が増えている。 家庭学習について1時間以上学習をしている生徒の割合は増えてきているが、家庭学習の時間が30分以下の生徒の割合は全国平均と比較してかなり多い。家庭学習の重要性を生徒に伝えるとともに家庭に対しても家庭学習の重要性について伝える必要がある。 休日の家庭学習の時間が少ない(全くしていない、または、1時間未満)の生徒が全国平均の1.3倍おり、休日の家庭学習に課題がある傾向がうかがえる。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

教科においては、本市教委の提唱する『わかる授業』『5つのポイント』を授業スタンダードとし、全教科で、生徒が自分の意見を述べたり友達の考えを聞いたりすることで、主体的・対話的で、深い学びが行えるよう授業改善に取り組んでおり、これを継続する。

補完学習(向洋検定)を毎日帰りの会の時間前に行い基礎・基本的な問題を繰り返し、説くことで基礎学力の向上を図ってお

② 家庭生活習慣等に関する取組

家庭学習を全くしていない生徒の割合は少ないが、生徒が積極的に家庭学習に取り組むような工夫を考える必要がある。そこで、まず、家庭学習の重要性を生徒に認識させるとともに、PTAと連携し、保護者に向けた、生徒の家庭学習の習慣化を図る取組を学校通信や